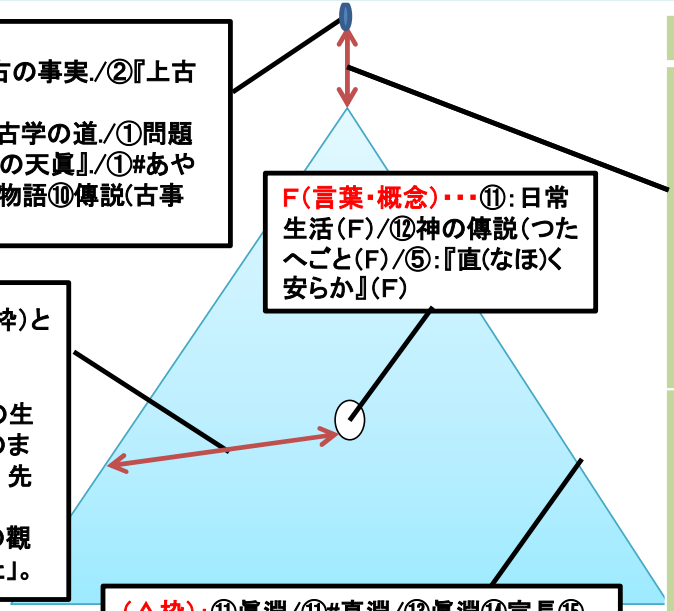
小林秀雄著『本居宣長』:四十七章主題《『あやし』(理りなし)が,古學本來の構造なのであり,『あやし』の構造を明らめて行くのが,古學に携はるといふ事》その「關係論」的纏め。

①#さかしら②#上古の事実③歌の[しらべ]⇒からの關係:一種の①の働きで,⑪は,その所謂②[とは:神代といふも名の異なるのみにて,同じく人の上なるべき]の[おぼつかなさ]も,[あやしさ]も,結局,③(#天地のしらべ)のうちに解消された,と信じたのだが,(次項へ続)⇒⑪眞淵。
⑤#しらべ⑥#上古の事実⇒からの關係:(前項⇒)實を言へば,影の薄れた⑤[とは:無色透明化した『#天地のしらべ』の事]と共に,⑪の言ふ⑥[とは:『#神代といふも名の異なるのみにて同じく人の上なるべき』]自體が霧消して了つた,といふのが眞相だつたのである⇒⑪#真淵。
②『上古の事實』⑧神⇒からの關係:⑬の身勝手な②の尊重が語る、⑧の名だけを保存した、上の空の言葉〔とは:『神代といふも名の異なるのみにて,同じく人の上なるべき』の事〕は、⇒「⑪:日常生活(F)/⑫神の傳説(つたへごと(F)」⇒E:⑮の、眼の前の⑧の姿なくしては、成り立たなかつた、⑪、その生きた味ひが、⑬には、そつくり無視されてゐる。これは、⑫の有りのままの姿〔例:『迦微』は、古言(いにしへごと)のふりの體言命名〕を、先づ壞した上でなければ起り得ない事だ、と⑬は考へた⇒⑬眞淵⑭宣長⑮上古の人々。

①#あやし(理りなし)②世の中③あらゆる事④なに物⑤周囲⑥古学の道⇒からの關係:①の不徹底な使ひ方[とは:あやしき(理りなし)ものに對する,さかしらな態度]ばかりが,⑤に行はれてゐる様を,見てゐる内に,それが,⑥を,遂に誤らす事になつたのが,はつきりして來た⇒宣長
①問題②古學の主題③『あやし(理りなし)』④『上代の心ばへの驚く程の天眞』⇒からの關係:⑥は、『①として扱はれるのを、初めから拒絶してゐるやうなもの』を、②③として捉へ、⇒「⑤:『直(なほ)く安らか』(F)」⇒E:③の對象を④即ち⑤とした。それ故に、⑤を明らめる事は,⑤の觀照の世界を擴げ深め,⑤をわが心とする(自照)以外にないと捉へた⇒⑥宣長(△枠)。
①#あやし④#古学⑧#知識⑩#構造⇒からの關係:①[部分的な斷定的な⑧の集積,或は #推論的進行(#さかしら)を以てしては決して出會へない,の意]が,④本來の⑩なのであり,①の⑩を明らめて行く(即ち:④が蔵する難局を切り抜ける)のが,④に携はるといふ事⇒#宣長
③世の中の事⑦何物⑧源氏論⑨物語⑩傳説(古事記)⑪古書⇒からの關係::つらつら思ひめぐらせば,③,⑦か,あはれならざると觀じた⑲を得て,⑧は盡きたのを思ひ出して貰へばよい.⑨が⑩に變つた所で,最上と信ずる⑪の讀み方を變更する理由は,⑳にはなかつた⇒⑱身⑲式部の眼⑳宣長

(物:場 C')・・・
①#さかしら②#上古の事実③歌の[しらべ]。/⑤#しらべ⑥#上古の事実./②『上古の事實』⑧神。
①#あやし(理りなし)②世の中③あらゆる事④なに物⑤周囲⑥古学の道./①問題②古學の主題③『あやし(理りなし)』④『上代の心ばへの驚く程の天眞』./①#あやし④#古学⑧#知識⑩#構造/③世の中の事⑦何物⑧源氏論⑨物語⑩傳説(古事記)⑪古書



F(言葉・概念)・・・⑪:日常生活(F)/⑫神の傳説(つたへごと(F)/⑤:『直(なほ)く安らか』(F)

E:〔F(言葉・概念)との附き合ひ方・用法〕・・・「So called」「Fと(△枠)との距離獲得」(Eの至大化)。
～～～